

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：34310  
 研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2009～2011  
 課題番号：21320038  
 研究課題名（和文） 榎茂都陸平の舞踊譜と宝塚歌劇 — 新舞踊『春から秋へ』を中心に  
 研究課題名（英文） The dance notation of Rikuhei Umemoto and the Takarazuka Revue  
 — with special attention to the Shin-buyou <Haru kara Aki e (from Spring to Autumn)>  
 研究代表者  
 根岸 一美 (NEGISHI KAZUMI)  
 同志社大学・文学部・教授  
 研究者番号：80097956

## 研究成果の概要（和文）：

1921年（大正10年）に宝塚少女歌劇において上演された新舞踊『春から秋へ』について、榎茂都陸平による舞踊譜の解説と原田潤による楽譜の演奏解釈を行い、この作品の復元上演を実現した。この活動を通じて、1）『春から秋へ』が舞踊的にも音楽的にも西洋の前衛性を備えた斬新な作品であったことを明らかにし、2）舞踊学、演劇学、音楽学、文化史学といった多様な視点からの宝塚歌劇研究の一つのモデルを提示することに成功した。

## 研究成果の概要（英文）：

In this study we tried and realized a reconstruction of the Shin-buyou (New Dance) <Haru kara Aki e (from Spring to Autumn)>, which was first produced in 1921 (Taisho 10) on the Takarazuka Revue, from the sources of dance notation by Rikuhei Umemoto and musical score by Jun Harada. As the results of this study we showed clearly that this work of Shin-buyou was a masterpiece with very high originality equaled to the European models both in choreographic and musical terms, and moreover, proposed a research model for the Takarazuka Revue from multiple viewpoints of choreographic, theatrical, musicological and cultural studies.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
年度			
総計	5,300,000	1,590,000	6,890,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：榎茂都陸平・原田潤・宝塚歌劇・新舞踊・『春から秋へ』・舞踊譜・復元上演

## 1. 研究開始当初の背景

長年にわたり榎茂都陸平の舞踊譜および舞踊活動を研究してきた桑原和美（就実大学）と、原田潤の音楽作品を研究してきた武石みどり（東京音楽大学）の二人が、『春か

ら秋へ』の舞踊譜とオーケストラ用スコアの両方が現存することを確認した時点から、本課題の構想が具体化した。初期の宝塚作品については音源や画像資料がきわめて少ないため、これまでの宝塚研究は、個々の作品論

よりも、当時の言説に基づく全般的な考察が中心となってきた。総合芸術でありながらも、演劇学、舞踊学、音楽学、文化史学等、さまざまな立場からの研究が個別に進められている状況であった。

このような状況下で舞踊譜とスコアという一次資料が得られたため、本課題においては、①資料に基づき作品を実際の舞台で復元することにより、具体的な作品研究を行うこと、また②舞踊、音楽等複数の側面から学際的な考察を行うことを目指すこととした。

すでに宝塚交響楽団（戦前に宝塚少女歌劇のオーケストラ団員によってクラシック音楽の演奏活動を行っていた）ならびにその創設者・指揮者であるヨーゼフ・ラスカについての研究を行い、古い楽譜資料の復元上演の経験のある根岸一美（大阪大学、のちに同志社大学）を研究代表者とし、宝塚歌劇関係の著書のある渡辺裕（東京大学）、さらには根岸とともに楽譜の電子音源化の経験がある井手口彰典（鹿児島国際大学）が加わって、本課題に関する共同研究を開始した。舞踊の復元を開始した2年目からは、演舞指導者として坂本秀子（日本女子体育大学）がメンバーに加わった。

## 2. 研究の目的

①舞踊譜が現存する『春から秋へ』を対象として、大正時代の宝塚少女歌劇において用いられた舞踊譜とそれに基づく舞踊実践を考察する。

②現存するオーケストラ・スコアを基に実際に楽曲を演奏し、その音楽的特徴を明らかにする。

③音楽と舞踊とを合わせて再現することにより、大正10年の段階で試みられた新しい舞踊作品を、音楽、舞台美術、衣裳等、さまざまな側面との関わりにおいて考察し、その特徴を明らかにする。

④上記考察結果を基にして、当該作品が日本の洋楽受容史、舞踊史、演劇史においてどのような独自性、先駆性を有するものであったかを検討し、宝塚少女歌劇が果たした役割について再検討する。

## 3. 研究の方法

①『春から秋へ』の舞踊譜を、榎茂都流舞踊家の協力を得て解説し、その動きと振付の特徴を明らかにする。

②原田潤による楽譜と榎茂都陸平による舞踊譜を照合し、舞踊が音楽とともにどう進展するかを確認する。楽譜と舞踊譜の不一致点を確認し、明らかに後にカットされたと思われるフーガ部分については推測再現を作曲家に依頼する。

③原田潤の『春から秋へ』以外の現存楽譜をチェックし、その作曲様式の特徴をつかむ。

④東京音楽大学有志学生のオーケストラで楽譜を演奏・録音し、その音源を用いて日本女子体育大学有志学生が舞踊を再現する。

⑤舞台面と衣裳について当時の記録を確認し、復元するかしないか、どの部分を推測復元するかについて検討する。

⑥当該作品、および当時の宝塚少女歌劇、オーケストラに関する資料・記録を収集し、洋楽史、舞踊史、文化史の諸視点から考察する。

⑦一般公開で再現上演を行い、同時にシンポジウムとディスカッションを開催して、学際的な情報・意見交換の場を実現する。

## 4. 研究成果

①『春から秋へ』の舞踊譜は、榎茂都流が用いてきた舞踊譜と同様、縦書きの体裁で記譜され、日本舞踊の用語が多数使用されているが、その一方で西洋舞踊の用語や「舞楽ノ心ニテ」といった指示も見られ、全体に異なる舞踊形式が大胆に折衷されているのが特徴である。

②原田潤による音楽は、最初と最後の部分が大胆な不協和音や半音階による前衛性を示している一方で、途中には3拍子のワルツ部分や延々と模倣を繰り返す多声書法の部分が見られ、西洋音楽の多様な要素を楽曲内に含めようとした意図が見てとれる。加えて、部分的には日本的な旋律も見られる。

③原田の他の歌劇作品が少女歌劇団員に歌いやすい平易で日本的な旋律の楽曲であったのに比べると、『春から秋へ』は西洋的要素を大胆かつ多様に駆使している点が大きな特徴である。

③実際に演奏してみた結果、原田潤は管弦楽法およびフーガ作曲の点で実力と経験が不足していた感がぬぐえないが、同時代の日本のオーケストラ作品を考慮すれば、当時としては大変挑戦的な作曲様式の作品であったと言える。

④オーケストラの演奏音源を用いた舞踊の全体（フーガ有稿とフーガ無稿）、および衣裳を付けてのフーガ有稿の映像を記録した。

⑤舞台面と舞台装置については、当時の記録が少なく、資金的にも大きな負担となることが推測されたため、今回の再現上演では再現を試みないこととした。また、舞踊譜中に具体的な図示がある主役の二匹の蝶の衣裳については忠実な再現を行い、記録がほとんど無い残りの蝶の衣裳は推測再現することとした。

⑥当該作品は、大正15年に上記「1. 研究開始当初の背景」で触れた宝塚交響楽団が定期演奏会を開始する前の時期にあたるため、オーケストラの編成と団員に関する情報が少ない。現存記録を基に今回は25名のオーケストラで推測を含めた復元を行った。この規模のオーケストラが常時活動し、公演ごと

に新作を演奏していた点で、また『春から秋へ』のような実験的作品を演奏しえた点で、宝塚少女歌劇は大正期の独自の文化形成に影響力の大きい存在であったと言える。

⑦シンポジウムでのパネリストを依頼した細川周平、袴田麻祐子両氏にも協力を仰ぎ、『春から秋へ』上演の音楽文化的コンテクストを検討した。類似のジャンルとして、同時期に多くの団体で手がけられた「お伽歌劇」の諸作品との比較検討を行ったが、それらとは比較にならない高度な技法や表現が追求されていることが確認された。その意味でむしろ、ベルリンで最先端の美術を学び、それを住宅のデザインにまで昇華させていった齋藤佳三などととも、総合芸術的な「家庭改造」思想とのつながりで位置づけた方が実態に即しているとの認識を得ることができた。

⑧2012年2月18日(土)、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて復元上演ならびにシンポジウムを実施した。シンポジウムでは、前記の袴田麻祐子氏と細川周平氏をパネリストに迎え、約100名の来訪者を対象として、今回の再現上演の基礎となった研究内容を発表するとともに、多様な視点からの考察やコメントを通して、初期宝塚の舞踊及び音楽の様相を明確化した。音源を用いた舞踊の再現上演のちディスカッションを行い、多様な専門領域の宝塚研究者と関係者が初めて一堂に会し、具体的なイメージを共有しながら意見を交換する場を実現した。これにより、3年間の共同研究の成果を発表し、同時に総合的な研究モデルを提供することができたと考える。シンポジウムと再現上演については予めHPで広報を行い、当日は、研究の基礎的成果をまとめたパンフレットを配布した。また当日の全プログラム内容について記録DVDを作成し、関連諸方面に配布した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① WATANABE Hiroshi, Building the body and mind of Japanese “Nationals”: Modern history of “Song (shōka)” in Japan, International Yearbook of Aesthetics, 査読有、第13巻、2009、pp. 198-208
- ② 桑原和美、1920-30年代の宝塚歌劇における岩村和雄のバレエ、演劇博物館グローバルCOE紀要 演劇映像学2010、査読無、第3集、2011、pp. 279-308

[学会発表] (計2件)

- ① 桑原和美、阪神間における西洋舞踊受容と宝塚歌劇、日本演劇学会、2009/6/27
- ② 桑原和美、戦前の西洋舞踊受容と「宝塚歌劇」一棟茂都陸平と岩村和雄の前衛、早稲田大学演劇博物館グローバルCOE西洋演劇コース・オペラ研究会主催講演会、2009/11/27

[図書] (計1件)

- ① 渡辺裕、中央公論新社、歌う国民—唱歌、校歌、うたごえ、2010、294

[その他]

ホームページ

<http://harukara-akie.com/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

根岸 一美 (NEGISHI KAZUMI)  
同志社大学・文学部・教授  
研究者番号：80097956

### (2) 研究分担者

渡辺 裕 (WATANABE HIROSHI)  
東京大学・人文社会系研究科・教授  
研究者番号：80167163

武石 みどり (TAKEISHI MIDORI)  
東京音楽大学・音楽学部・教授  
研究者番号：70192630

桑原 和美 (KUWAHARA KAZUMI)  
就実大学・人文科学部・教授  
研究者番号：60341137

井手口 彰典 (IDEGUCHI AKINORI)  
鹿児島国際大学・福祉社会学部・講師  
研究者番号：00469412

坂本 秀子 (SAKAMOTO HIDEKO)  
日本女子体育大学・体育学部・准教授  
研究者番号：90277682